

という目標を掲げる方が少なくありません。その思いはそれぞれで、共同生活であるが故の息苦しさであったり、結婚をしたいといった目標からであったり、障がい者という差別の中での悔しさ、生きにくさが思いの裏にあるのでしょうか、中には、支援というものから抜けたいという思いなどもあったりします。もちろん、一方で今の生活が気に入っているので、このままこの生活をしたいという方も多くいます。重度か軽度かということではなく、“今”グループホームの支援が“必要”か“必要でない”かで利用を考えていくということこそ本来の形ではないでしょうか。

メープルの利用者は、それぞれが自分なりに形成してきた生活というものをもっており、ともしれば、日々の生活の流れの中で、我々が行う支援が“なんとなく”になる危険性があります。グループホームが終のすみかではなく、あくまで地域の中で“今”暮らしていくために、選んだ一つのサービスである事を意識し、その人が“自分らしい暮らしを見つける”ためにグループホームでどんな支援を必要としていて、どんな支援が出来るのかを具体的にかつ、分かりやすく、利用者にご理解していただけて、支援者側が共通認識を持ってその目標に向かっていける支援計画とその目標に寄り添っていける支援の充実を図っていき、“支援の質にこだわっていく”一年になるように努力していきたいと思っております。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。



心の交流のあるサービスを、より多くの楽しい瞬間を

**居宅介護事業所
管理者 黒岩 剛史**

居宅介護事業所 大阪市手をつなぐ育成会の管理者に着任して、1年が経ちました黒岩 剛史と申します。今年度も引き続きよろしくお願いいたします。

昨年度は5月に事業所を西区から港区に移転し、顔の見えるサービス、心のこもったサービスを目指してきました。今年度もその流れを引き継ぎ、より一層のサービス向上に努力していきたいと思っております。そのために、職員間で以下3つの



ことを目標にしようと話し合いました。

1つ目は利用者や保護者と契約更新等で出来る限り担当者顔と顔を合わせ、念入りな聞き取りや対話をし、サービスに活かすこと。

2つ目は職場内や業務の中でより良くなること、またはサービス向上につながる工夫やアイデアを出していくこと。

3つ目は安心・安全面のための予測と準備を念入りにすること、事前に危険なことは無いか、無理なスケジュールになっていないかを確認していくことです。

当事業所のサービスによってより多く、利用者が笑顔になれたり、楽しかったという瞬間を作りたいと考えます。先日、私が付き添った利用者はゲームに挑戦し、高得点を取った時に「やった！」と腕を天井に上げました。私もうれしくなり一緒に「やったあ」と腕を上げ叫びました。周囲の人は驚いていたのですが、何かご本人と一緒に楽しめた感覚になりました。こういったことを増やしていければと思います。

また、昨年度、千葉県で行われました全国事業所研修会で『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』の著者である東田 直樹さんの講演を聞く機会がありました。講演の内容は私には次のように聞こえました。「支援者の方は僕らの事をいろいろ理解していると思っていることが実は誤解が多くて、本音は違うんだよ」と・・・。

私どもの事業所では、目の前の利用者の本音の部分に出来るだけ近づけるように、耳を傾け、対話をし、交流を深めていけるよう、サービス提供責任者、ヘルパーともに心がけていきたいと思っております。

今後とも、皆様からのご助言、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。



よりよい『はたらく・くらす』を見つけるお手伝い

**大阪市西部地域障がい者就業・生活支援センター
管理者 平松 朝径**

大阪市の事業である障がい者就業・生活支援センター(略称:就ぼつ)事業に携わり、通算7年目・管理者として2年目を迎えました。

全国で300ヶ所を超える事業となりましたが、そ

